

四季の歌をよむ

群馬県立女子大学名誉教授 北川 和 秀

【春と秋とを対比する歌】

天皇、内大臣藤原朝臣に詔して、春山の万花の艶と秋山の千葉の彩とを競憐はしめたまふ時、額田王、歌を以ちて判る歌

①冬ごもり 春さり来れば 鳴かざりし 鳥も来鳴きぬ 咲かざりし 花も咲けれど 山を茂み 入りても取らず 草深み 取りても見ず 秋山の 木の葉を見ては 黄葉をば 取りてぞしのふ 青きをば 置きてそ嘆く そこし恨めし 秋山われは(一・一六)

額田王

②…(吉野の宮の高殿から国見をする) 疊づく 青垣山 山神の 奉る御調と 春

べは 花かざし持ち 秋立てば 黄葉かざせり…(一・三八) 柿本人麻呂

③やすみしし わご大君の 高知らず 吉野の宮は 疊づく 青垣隠り 川波の 清き 河内そ 春べは 花咲きををり 秋されば 霧立ち渡る…(六・九二三) 山部赤人

(春の日長・秋の夜長)

④霞立つ長き春日を挿頭せれどいや 懐しき梅の花かも(五・八四六) 小野氏淡理

⑤…自妻と たのめる今夜 秋の夜の 百夜の長さ ありこせぬかも

(四・五四六) 笠金村 *神亀二年三月の作

【暦の四季】

(立春)

①ひさかたの天の香具山この夕霞たなびく春立つらしも(一〇・一八一二)

柿本人麻呂歌集

十二月十八日、大監物三形王の宅に宴する歌三首(そのうちの二首) *節分の日

②み雪降る冬は今日のみ鶯の鳴かむ春べは明日にしあるらし(二〇・四四八八) 三形王

(立夏)

③春過ぎて夏来るらし白栲の衣干したり天の香具山(一・二八) 持統天皇

立夏四月、既に累日を経れども、しかも由し霍公鳥の喧くを聞かず。因りて作る恨の歌二首（そのうちの一首） *三月二十五日が立夏

④あしひきの山も近きを霍公鳥月立つまでに何か来鳴かぬ（一七・三九八三）大伴家持
霍公鳥は、立夏の日に来鳴くこと必定す。……大伴宿祢家持、感を懐に発して聊かに此の歌を裁れり。三月二十九日

（立秋）

⑤秋立ちて幾日もあらねばこの寝ぬる朝明の風は手本寒しも（八・一五五五）安貴王

【春】

①石ばしる垂水の上のさ蕨の萌え出づる春になりけるかも（八・一四一八）志貴皇子

②新しき年の始の初春の今日降る雪のいや重け吉事（二〇・四五一六）大伴家持

（天平）十八年正月、白雪多に降りて、地に積むこと数寸なり。時に、左大臣橘卿、大納言藤原豊成朝臣と諸王臣等とを率て、太上天皇の御在所中宮西院に参入りて、掃雪に供へ奉りき。……勅りたまはく、汝諸王卿等、聊かに此の雪を賦して各々其の歌を奏せとのりたまふ（その折の歌から一首）

③新しき年のはじめに豊の年しるすとならし雪の降れるは（三九二五）葛井諸会

④春の野にすみれ採みにと来しわれそ野をなつかしみ一夜寝にける（八・一四二四）山部赤人

⑤あしひきの山桜花日並べてかく咲きたらばいたく恋ひめやも（八・一四二五）山部赤人
梅花の歌三十二首 序を并せたり（そのうちの二首）
天平二年正月十三日に、帥の老の宅に萃まりて、宴会を申きき。……

⑥わが園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも（五・八二二）大伴旅人

⑦梅の花散らまく惜しみわが園の竹の林に鶯鳴くも（五・八二四）阿氏奥島

四年丁卯春正月、諸王諸臣子等に勅して、授刀寮に散禁せしむる時に、作る歌一首 短歌を并せたり（そのうちの短歌）

⑧梅柳過ぐらく惜しみ佐保の内に遊びしことを宮もとどろに（六・九四九）作者未詳

右は、神亀四年正月、数王子また諸臣子等、春日野に集ひて、打毬の楽を作す。その日忽に天陰り雨ふり雷なり電す。この時に宮の中に侍従と侍衛と無し。勅して刑罰に行ひ、皆授刀寮に散禁して妄りて道路に出づることを得ずあらしむ。時に悒憤して、この歌を作る。作者詳らかならず

（天平勝宝五年二月）二十三日、輿に依りて作る歌二首

⑨春の野に霞たなびきうら悲しこの夕かげに鶯鳴くも（一九・四二九〇）

⑩わが屋戸のいささ群竹吹く風の音のかそけきこの夕かも（四二九一）

二十五日、作る歌一首

- ⑪ うらうらに照れる春日に雲雀あがり情悲しも独りしおもへば（四二九二）
春三月、諸卿大夫等の難波に下りし時の歌二首 短歌を并せたり（そのうちの反歌）
⑫ わが行きは七日は過ぎじ龍田彦ゆめこの花を風にな散らし（九・一七四八）高橋虫麻呂
⑬ 春の園紅にほふ桃の花下照る道に出で立つ娘子（一九・四一三九）大伴家持
⑭ 吾が園の李の花か庭に散るはだれのいまだ残りたるかも（一九・四一四〇）大伴家持
⑮ もののふの八十娘子らが汲み乱ふ寺井の上の堅香子の花（一九・四一四三）大伴家持
帰る雁を見る歌二首（そのうちの一首）
⑯ 燕来る時になりぬと雁がねは本郷思ひつつ雲隠り鳴く（一九・四一四四）大伴家持
⑰ 蝦鳴く神名火川に影見えて今か咲くらむ山吹の花（八・一四三五）厚見王

【夏】

- ① 月立ちし日より招きつつうち慕ひ待てど来鳴かぬ霍公鳥かも（一九・四一九六）

大伴家持

式部大輔石上堅魚朝臣の歌一首

- ② 霍公鳥来鳴き響もす卯の花の伴にや来しと問はましものを（八・一四七二）石上堅魚
右は、神龜五年戊辰、大宰帥大伴卿の妻大伴郎女、病に遇ひて長逝す。時に勅使式部大輔石上朝臣堅魚を大宰府に遣して、喪を弔ひ并せて物を賜ふ。その事既に畢りて駅使と府の諸卿大夫等と、共に記夷の城に登りて、望遊せし日に、この歌を作れるなり。
③ 我が宿の花橘に霍公鳥今こそ鳴かめ友に逢へる時（八・一四八一）大伴書持
④ わが幾許慕はく知らに霍公鳥何方の山を鳴きか越ゆらむ（一九・四一九五）大伴家持
⑤ 藤波の花は盛りになりにけり奈良の都を思ほすや君（三・三三〇）大伴四綱
同じ月（天平勝宝七歳五月）の十一日、左大臣橘卿、右大弁丹比国人真人の宅に宴する歌三首（そのうちの二首）755年

- ⑥ わが屋戸に咲ける石竹花幣はせむゆめ花散るないやをちに咲け（二〇・四四四六）

丹比国人

右の一首は、丹比国人真人の、左大臣を寿く歌なり。

- ⑦ 紫陽花の八重咲く如く弥つ代にをいませわが背子見つつ偲はむ（四四四八）橘諸兄
右の一首は、左大臣、味狭藍の花に寄せて詠めり。

痩せたる人を嗤咲ふ歌二首

- ⑧ 石麻呂にわれ物申す夏痩せに良しといふ物そ鰻取り食せ（一六・三八五三）大伴家持
⑨ 痩す瘦すも生けらばあらむをはたやはた鰻を捕ると川に流るな（三八五四）

右は、吉田連老といふひとあり。字は石麻呂と曰へり。所謂仁敬の子なり。その老、人と為り身体甚く痩せたり。多く喫飲すれども、形飢饉に似たり。此に因りて大伴宿祿家持の、聊かに

この歌を作りて、戯れ咲ふことを為せり。

⑩ 隠りのみ居ればいぶせみ慰むと出で立ち聞けば来鳴くひぐらし（八・一四七九）

大伴家持

【秋】

山上臣憶良の、秋の野の花を詠む二首

① 秋の野に咲きたる花を指折りかき数ふれば七種の花 其の一（八・一五三七）山上憶良

② 萩の花尾花葛花瞿麦の花女郎花また藤袴朝貌の花 其の二（一五三八）

③ 朝顔は朝露負ひて咲くといへど夕影にこそ咲きまさりけれ（一〇・二一〇四）作者不明

* 秋の雑歌「花を詠む」

④ わが岡にさ男鹿来鳴く初萩の花嬬問ひに来鳴くさ男鹿（八・一五四一）大伴旅人

⑤ 秋の野に咲ける秋萩秋風に靡ける上に秋の露置けり（八・一五九七）大伴家持

⑥ 天雲に雁そ鳴くなる高円の萩の下葉はもみち敢へむかも（二〇・四二九六）中臣清麻呂

⑦ この頃の暁露にわが屋前の萩の下葉は色づきにけり（一〇・二一八二）作者不明

⑧ 秋萩の散りの乱ひに呼びたてて鳴くなる鹿の声の遙けさ（八・一五五〇）湯原王

⑨ 人皆は萩を秋と云ふ縦しわれは尾花が末を秋とは言はむ（一〇・二一一〇）作者不明

⑩ 夕されば小倉の山に鳴く鹿は今夜は鳴かず寐ねにけらしも（八・一五一一）舒明天皇

⑪ 今朝の朝明雁が音聞きつ春日山黄葉にけらしわが情痛し（八・一五一三）穗積皇子

⑫ 春日野に時雨降る見ゆ明日よりは黄葉挿頭さむ高円の山（八・一五七一）藤原八束

⑬ 隠口の泊瀬の山は色づきぬ時雨の雨は降りにけらしも（八・一五九三）大伴坂上郎女

⑭ 夕月夜心もしのに白露の置くこの庭に蟋蟀鳴くも（八・一五五二）湯原王

【冬】

① 葦辺行く鴨の羽交ひに霜降りて寒き夕は大和し思ほゆ（一・六四）志貴皇子

神亀元年甲子冬十月五日、紀伊国に幸しし時に、山部宿祢赤人の作る歌一首 短歌
を并せたり（そのうちの反歌一首）

② 若の浦に潮満ち来れば瀉をなみ葦辺をさして鶴鳴き渡る（六・九一九）山部赤人

③ 旅人の宿りせむ野に霜降らば我が子羽ぐくめ天の鶴群（九・一七九一）遣唐使随員の母

④ 沫雪のほどろほどろに降り敷けば平城の京し思ほゆるかも（八・一六三九）大伴旅人

⑤ ぬばたまの今夜の雪にいざぬれな明けむ朝に消なば惜しけむ（八・一六四六）

小治田東麻呂

⑥ 酒杯に梅の花浮かべ思ふどち飲みての後は散りぬともよし（八・一六五六）

大伴坂上郎女

⑦ 卷向の桧原もいまだ雲居ねば小松が末ゆ沫雪流る（一〇・二三一四）柿本人麻呂歌集